

1 環境共生功労賞

中根 英昭氏 前会長 高知工科大学名誉教授

大気環境分野における学術研究・教育及び日本環境共生学会への貢献

中根氏は2013年の入会以降、2014-2015 理事、2016-2017 常務理事、2018-2022 まで日本環境共生学会会長として、組織体制の強化や会員の学会活動の活性化など、本学会の発展に多大な貢献をされ、現在も常務理事として活躍しており、本学会の発展に多大な貢献をされた。

研究活動では、主に大気環境分野で活躍しており、特に成層圏オゾンの研究では多くの研究成果を上げており、国際的なオゾン観測ネットワークにも参加した。また、温室効果ガス研究にも従事され、IPCC のガイドライン報告書リードオーサーを務めるなど、国内外での活躍している。IPCC における活動は2007年のノーベル平和賞受賞への貢献が、認定されている。さらに、近年では深層学習を環境研究に導入する研究を行うなど、積極的な研究を行っている。

社会貢献では、環境省の中央環境審議会の委員を2019-2021 まで務めるとともに、現在は環境省 温室効果ガス排出量算定方法検討会委員、環境再生保全機構環境研究総合推進費プログラムオフィサーを務めるなど、国の環境行政等に多大な貢献をしている。

このように、日本及び世界の環境共生と本会の発展への貢献は多大であり、環境共生功労賞に相応しい。

2 環境活動賞

愛知県殿、公益財団法人名古屋産業科学研究所殿

社会人向け環境リーダー育成事業「あいち環境塾」

愛知県、公益財団法人名古屋産業科学研究所が2008年度から実施している「あいち環境塾」は昨年までに300名を超える卒塾生を輩出し、愛知県の環境活動に大きく貢献している。特に、各企業から若手が多く参加しており、愛知県の企業の環境活動に大きく貢献しているとともに、将来の環境にも影響が及ぶといえる。NPO法人を設立したり、県からも卒塾生への活動支援を行っていたり、卒塾後のサポートも十分である。これほど大規模で長期間に及ぶ環境教育事業は珍しく、環境活動賞にふさわしいといえよう。

3 著述賞

塚田英晴氏、園田陽一氏、浅利裕伸氏、山本以智人氏、内野祐弥氏、玉那覇彰子氏、亘悠哉氏、湊秋作氏、饗場葉留果氏、末次優花氏、原文宏氏、伊東英幸氏

野生動物のロードキル 東京大学出版会 2023

本書は、はじめににおいて「日本における最初の、そして最新の全国レベルのロードキル研究成果の集大成である」と書かれている通り、その内容、構成は、第I部のロードキルの歴史的背景および生態学的影響から、第II部の日本の当該問題における代表的哺乳類（外来種も含む）の事例詳解、世界各国のデータベースの現況とその活用状況、そして、第III部のこれからのロードキル問題への対策となっており、生物多様性保全上大きな問題であるロードキルについて、体系的かつ詳細な情報を得ることが出来る著作である。

各章においては、最新の研究成果を解説するだけでなく、経年変化のグラフ・図（例えば、当該問題の発生件数、発生場所の変化など）や動物別の生態学的なデータを示すグラフ・図（例えば、性別による差、環境による差や対策有無における発生件数の差、発生環境の図解など）、さらには現場の写真も多く、学術的な情報を得られるだけでなく、初学者の読みやすさや理解を深めることへの配慮が十分になされている。また、先行研究の出典も充実しており、専門家にも役立つ一冊といえる。

この様に、国際的なモータリゼーションが進む中、自然共生社会を目指す昨今において、ますます大きな問題となるであろうロードキルについて、初学者から関係の専門家まで多くの有用な情報が得られる著作となっており、環境共生社会の進展に寄与する著作であることから、著述賞に相応しい。

4 奨励賞

1) 藤山淳史氏 北九州市立大学

資源循環の高度化に資する評価手法の開発に関する研究（総合題目）

候補者は、望ましい地域資源循環のあり方の模索とその構築のための政策提言を見据えた研究に一貫して取り組んでおり、産業廃棄物や循環資源の現状評価や要因分析、資源循環拠点立地モデルといった評価手法の開発に関する論文を多数発表している。こうした一連の研究成果は、「地域循環圏」の構築に向けた議論に対して資源循環拠点の観点から大きな貢献を果たすとともに、資源循環を進めていくうえで必要な技術やシステムの普及にも役立っている。また、環境面のみならず経済面・社会面を含む総合評価指標として SROI（社会的投資収益率）の資源循環分野への導入にも大きな貢献を果たしている。以上より、奨励賞に相応しいものと判断される。

2) 積田典泰氏 日本大学

東南アジア諸国での都市洪水に対する適応策の評価に関する研究－主に洪水発生時のアクティビティの変化に着目して－（学位論文、日本大学）

本論文は、気候変動に対する脆弱性が大きい発展途上国における適応策という時宜を得た重要なテーマに対して、東南アジアの都市において都市洪水が発生した場合の人々の交通行動を分析し、アクティビティベースモデルを用いて推計する方法を提案するとともに、洪水の影響を軽減するための適応策を提案し、その導入効果を提案したアクティビティベースモデルを用いて推計、評価した研究である。特に、洪水発生時の交通行動の変化をアクティビティの考え方で明らかにしたこと、これをアクティビティベースモデルによって表現する方法を構築したこと、洪水による冠水時の移動を確保するための適応策を提示した点で、学術上の意義がある。一度都市洪水が発生すると外水氾濫により多くの範囲が長期間冠水するため、この問題を総合的に捉え、道路嵩上げ、移転促進など具体的解決策を提案しており、環境共生の進歩、発展への貢献するものである。以上より、奨励賞に相応しいものと判断される。

論文賞

山下 奈穂, 橋本 征二, 白川 博章, 谷川 寛樹

非金属鉱物系資源の物量投入産出表の整備及び循環指標群への適用

環境共生 2021 年 38 巻 2 号 p. 176-187

本論文は、非金属鉱物資源のマテリアルフロー・ストック分析を行い、ライフサイクルの各段階における効率性を議論したものであり、直接投入物量、国内加工生産物量、使用済み製品の回収率等に関する多くの知見を得ている。網羅的なレビューや調査を行った上で、政策課題を解決するための基礎資料が提供されている点が高く評価できる。また、廃棄物のライフサイクルの連関分析が可能となった点も意義あると考えられ、これを連鎖させた分析が出来れば、長期的インパクトも評価できる。環境共生社会の進展に寄与する論文であることから、著述賞に相応しいといえる。